

季刊 ジャネット Ja-Net

No.17

2001年4月25日発行

View from the Other Side	3
あちこち日本語ご紹介 [高知県 土佐市]	4
あちこち日本語ご紹介 [スイス ジュネーブ]	5
教材紹介『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』	6
『絵でわかるかんたんかんじ80』	7
なんでも情報BOX	8

Ja-NetはJapanese Networkの略です。「[こほんご]を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

スリーイーネットワーク

巻頭寄稿

日本語教育と日本語研究のハッピーな関係

広島大学大学院助教授
白川博之



1. 日本語だから難しい

日本語教師をめざす人々を相手に日本語文法の入門の授業を始めてから10年余り経つ。大学の日本語教員養成コースと学外の養成講座の両方で教えているが、どちらの授業でも、最初の時間に話すことは毎年だいたい決まっている。

まず、外国語学習における文法の重要性をひとしきり力説して(と言っても、無闇に自己宣伝するのではなく、用心深く、「文法さえ勉強すれば話せるわけではないが、文法を勉強しなければ話せない」などと言っている)、それから、「しかし、日本人にとっては日本語は母語であるだけにかえて客観的に考えることはむずかしい」という話になり、最後は、「今日の格言」などと言いながら「憶えるな。考えよ。」と黒板に大書して、文法を勉強するときの心構えを説いて締めくくる。

それから十数回にわたる授業は、やれ「は」と「が」だの、「～ている」だの、「あげる」と「くれる」だのといった具体的な文法事項の話になるが、入門用のコースで私が終始一貫して伝えようとしていることは、ただ一つ、「新しい外国語を一つ学ぶつもりで二ホンゴをゼロから考え直さなければならぬ」ということである。個々の文法知識もさることながら、まずは無意識に使っている日本語の仕組みを意識的に考える、その考え方を身につけて欲しいということに尽きる。

ところが、言うは易く行うは難しで、この「文法的な考え方」というものを体得してもらうにはなかなか骨が折れる。

自分が知らず知らずのうちに身につけたことを改めて他人に教えるのは難しい。母語ゆえの難しさはそこにある。学期末に学生に感想を書かせると、「母語なのにどうしてこんなにややくいしいのかと思った」という類のものがよく見られるが、よく考えてみれば当たり前のお話である。もしかすると、自らも意識的に勉強した経験のある外国語(例えば英語)を教える方がま

だ簡単かもしれない。かくなる上は、「日本語なのにむずかしい」のではなくて「日本語だからむずかしい」のだと発想を転換して、日本語を見直す必要がある。

2. 「日本語教育」即「日本語研究」

とは言え、日本語を外国語のように客体視して分析することはなかなか難しい。手っ取り早いのは、実際に外国語として学んでいる学習者の立場に立って発想することである。

具体的には、学習者に対してどういう例文を提示すればその文法項目の使い方がよく理解できるのか、学習者はどういうところでつまずくのか、何がわかればそれをクリアできるのか、といった臨床的な観点から文法にアプローチするのが、早道である。

私は大学院生時代、寺村秀夫先生(1928-1990)の「日本語教授法」の授業を受講する幸せに恵まれた。「教授法」と銘打ってはいたが、その内容は多分に日本語学的なものだった。

たとえば、「～したところだ」という文法項目を導入するための会話例を3つ作ってきなさい、というような課題が出る。

「あれこれ理屈で説明しなくても、その例文を見ればその形式の使い方が理解できるような例文を作れ」という注文が付いている。これが、簡単そうに見えて結構難しかった。

もちろん、思いつきで作るのであれば、3つでも4つでもすぐできる。しかし、そういう例文は、得てして思い込みによる偏りがあることが多い。いろいろありうる用法のバリエーションの中から典型的な使い方を見定めて、過不足なくポイントを押さえて、自然な例文で示すというのは、やってみればわかるが、存外骨の折れる作業である。

日本語教師を目指す人(現職の先生も?)の中には、「日本語学的にはどうだか知らないけれども、結局、どのように教え

たらしいのですか」と、ハウ・ツーにばかり関心が向く人がときどき見受けられるが、「どのように教えるか」は「どこを押さえればその文法項目がわかったことになるか」ということからおのずと出てくることである。そして、それを考えることは、既に立派な日本語学的な営みである。

受講した当時は、そういうことに考えが及ばず、「『教授法』とは看板に偽りありで、日本語学の授業ではないか」などと思っていたが、今から思えば、寺村先生の授業は、非常に深い日本語教授法の授業だったと気づかされる。



寺村秀夫先生の還暦をお祝いする会にて（左から2人目が寺村先生。野田尚史氏〔左から4人目〕、佐久間まゆみ氏〔左から3人目〕らとともに。筆者は右端）

3. 「日本語研究」即「日本語教育」

日本語教育サイドの人にもっと日本語学的な思考をして欲しいと思うこともさることながら、日本語研究サイドの人間も、もっと日本語教育に関心を持ったらしいのに、と私などは思う。少なくとも、非母語話者による日本語学習ということを頭の片隅において日本語の研究をするだけでも、見えてくる世界はだいぶ違ってくるはずである。

文法研究のあるべき姿については様々な考え方があるだろうが、私は、文法記述の良し悪しは、日本語の学習・教授になにがしかの貢献ができるものか否かによって決まると思う。

日本語には学習者が習得しにくい文法項目がたくさんある。ちゃんと教えたつもりでも間違えやすいもの、教えても使えないもの、多種多様である。どのような勘違いからそのような誤用が生じるのか、どのような知識が足りないから使えないのか、という観点から探っていけば、日本語学的にも新しい知見が得られる可能性が大きい。

これは、何も、誤用例を採集したり、中間言語を研究したりすることだけを意味しない。文法記述をするプロセスで、自分なりに作った文法規則を「一人歩き」させることによって実践することができる。その説明を学習者が読んで理解したと仮定して、それを応用して正しく文が作れるかどうかを検証するのである。

この作業は、要するに、「規則に従えば言えてもいいはずなのに実際は言えない文」や「現に言える文なのに規則では説明できない文」がないかどうかを確認する作業である。これは、

取りも直さず、文法を習った学習者がそれを実際に使ってみるという表現行動をシミュレートする作業でもある。学習者の誤用は、かなりの程度、教わったおりに使って間違える場合が多い。つまりは、不適切・不十分な説明によって、出さずして出た誤用である。こういう誤用を予見して未然に防ぐことにより、文法記述はより良いものになる。

4. 日本語教育と日本語研究との相互互惠関係を

日本語の教科書や教師用指導書を見ると、旧態依然とした文法知識に基づいていると思われるものが多い。「この文法項目はこう教えるもの」と最初から決めてかかっているのではないかとさえ思われるふしがある。教えるべき文法のシラバスを、不動のものと考えてそれを前提に教授法を考えるのではなく、再点検して頂きたいし、せつかくの日本語研究の知見（ずいぶん詳しいところまで分かっているのです）をぜひ盛り込んでいって頂きたいと思う。

文法を研究をする人も、かゆいところに手が届くような良質の記述研究を心掛けて、日本語教育を支援していくことが望まれる。現状は、必ずしもそうなってはいない。例えば、日本語教育学会の学会誌や口頭発表における文法関係の研究を見ても、「なんでこのような研究がここに？」と思われるような研究が少なくない。残念なことである。

日本語教育と日本語研究との間に、お互いにとってハッピーな相互関係が再構築されることを心から希望する。



大学院のゼミ生とともに（皆、何らかの形で日本語教育関係の仕事に関わっている者ばかり）

白川博之

1958年東京生まれ。1987年筑波大学大学院博士課程単位取得満期退学（文学修士）、1989年広島大学講師（教育学部日本語教育学科）、1995年同助教授を経て、2001年4月より同大学院助教授（教育学研究科日本語教育学講座）。日本語教育学会大会委員会委員（1999年～）、日本語文法学会大会委員（2000年～）。専門は、現代日本語の文法。



このコラムでは 学習者の視点での話題をお届けします

VIEW FROM THE OTHER SIDE

西洋人にとっての漢字学習について

マイケル・ベキアレス



私の日本語は決して流暢ではないが、日本でのこの3年ほどの在学期間で飛躍的に向上したと思う。それまで日本語の勉強をしたのはアメリカの高校在学中の2年間と、留学した日本の大学での1年間だけだった。現在の仕事上、いろいろな人に会う機会が多い。そんな時によく聞かれる質問が、どうやって日本語を習得したかということだが、その答えの一つが漢字学習のコツである。これは独学で試行錯誤の末に自分なりに見いだしたもののだが、それについてここで少し触れたい。

漢字というのはその意味を形で表現できる力を持っているが、私達西洋人にとってなじみは薄い。そのため、とても理解し難く、試験のためだけの暗記に頼った学習法を続けている人が多い。しかし、その学習方法では記憶に残らないため、本当の意味で習得するのは極めて困難である。私自身も悩まされ、何度となく挫折しかけた。実際、高校で学んだ時から4年ほど日本語の勉強から遠ざかっていたが、ひょんなことから留学する機会に恵まれ、日本へ来た時に改めて関心を持ち、再度勉強を始めた。しかし、漢字の習得は依然として難しいものだった。その理由としては、自分自身が教室といった環境での学習が苦手だということもある。授業への集中力に欠けて、正直なところ当時は先生に迷惑をかけたこともしばしばあったと思う。そのことが、漢字を覚えるために、自分なりの方法を編み出すきっかけになった。これまでの失敗や成功から学んだことや、以前取った心理学や記憶の仕組みについての授業で参考になったことを活用した方法である。

どのような方法がよいかと考えていた時に、自分がよく覚えている漢字というのは授業でそれらの部首について勉強したものだった。もともとの漢字の形や意味と現在のそれとのつながりがはっきり分からなくても、基礎的な知識があれば、単なる線の塊に見えていた漢字がそれぞれ意味を持った部分の集合体となり、難なく覚えられるようになったのである。

それで、自分でこういった情報は他にないかと探していたところ、自分の漢字に対する考えを変える、ある一冊の本に出会った。この本の素晴らしいところは、漢字の部首だけではなく、その漢字の一つ一つの部分についての歴史、以前の形や意味、どのような過程を経て組み合わさったか、意味と発音との関係などの説明が載っていたということです。

この本の内容をもとに、何千何百という途方もない数の漢字に対して、どのように対処していったらよいかといった勉強のプランをたてることができた。スペースが限られているので、ここで詳しく話



できないが、重要なことはまず漢字をそれぞれ分類、分析し、どの順番でどの漢字を勉強するのか決めることである。この私の言う、覚える漢字の順番というのは、一般に日本人が学校で漢字を教わる際に使われる順番でもなく、常用漢字が否かといったことから完全に独立したものである。ここで、大切なのはそれぞれの分類についてとことん学習することである。それにより頭の中で構成部分の音や語源、さらには全体との関わりといったものが全てつながり、また新しい漢字を見てもまったく異質なものではなく、“仲間”といった風にどんどんその輪が広がるのである。したがって、新しい漢字を見てもすでに記憶にある、それらのつながりが一層深く刻まれるのである。そこで、私が自分自身の学習のために組み立てたプランは1日2時間の勉強を2週間続けるというものだった。その成果として600の漢字を学習し、今も割合にしっかり覚えている。この2週間の勉強は自分の漢字の知識、更には日本語の能力に多大な影響を与えたと思う。

当然のことながら、このような自分の勉強方法が他の全ての学習者に同様な効果を生むかどうかは私にも分からない。個人的な見解だが、頻繁に登場する約150の漢字の構成部分を、早い段階から丹念に学習することにより、学習者の漢字に対する理解や興味なども飛躍的に伸びるのではないかと思う。個人的に日本語学習についての他の意見も山ほどあるので、興味のある方は是非私にメールを送って下さい。

マイケル・ベキアレス

1974年米国イリノイ州生まれ。現在新潟県庁に国際交流員として勤務し主に翻訳業務に携わっている。大学で経済学を専攻し、交換留学生として専修大学に1年留学経験あり。メールアドレス：bekiares@hotmail.com

あちこち 日本語 ご紹介

国内編



高知県
土佐市

高校でもユニークな日本語教育と国際交流を

明德義塾高等学校国際語学コース
Ge Jun Feng

長い国際交流の歴史と日本語教育

黒潮が流れる横波半島にある四国高知県土佐市竜地区には、この2001年4月真新しい「明德義塾高等学校竜国際キャンパス」ができました。明德義塾といえば高校野球の甲子園連続出場で名を馳せていますが、同校には長い国際交流と日本語教育の歴史をも持っていることは案外知られていません。

22年前、本校はオーストラリアからの留学生を受け入れたことをきっかけに、日本語教育を始めました。しばらくは主に海外姉妹校からの高校生を相手に行う短期語学・文化留学という形でした。その後、スポーツを通じた長期留学生徒のためのコースも加えられました。そして、この数年日本の大学に入るために、日本語を習いに来る就学生が急増し、本格的な日本語教育が始められました。



高校野球で有名な明德義塾高等学校では、留学生も積極的にスポーツに参加する

高校ならではのコース作り

現在本校では次のように多様な留学目的に対応する対象別のクラス編成を行っています。

(1) カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど英語圏の姉妹校からの短期クラス。このクラスは不定期に来校し、期間は1カ月、3カ月、半年と各姉

妹校によって異なります。

(2) スポーツの特技を持つ外国人生徒が日本の高校で日本人生徒と同じように勉強・生活できるように日本語を習うクラス。始めの1年は午前中には集中的に日本語を勉強し、午後はスポーツクラブに参加します。2年目からは高校2年に編入

され、正規の高校課程を履修します。
(3) 大学進学クラス。日本で大学の合格を目指し、1年間集中的に四技能を身に付けるコースです。後半には進路指導を行い、それぞれの大学に合わせた個別入試対策や、小論文・面接練習も行います。いままで高知大学、立命館大学、日本大学、国士舘大学などの大学に合格しています。今年が大学入学を希望する留学生は去年の12名より3倍以上増え、約40名となりました。

各クラスは日本語授業以外に色々な日本文化の授業と体験もあり、音楽やコンピューターなどの授業も受けられ、運動会などのイベントがある時、日本人生徒と一緒に参加します。

日本でも数少ないユニークな特徴

まず特筆しなければならないのは明德に来る留学生が日本人生徒と同じように寮生活をする事です。これはすべての時間を利用でき、勉強に没頭することを意味するだけでなく、教室で習った知識をすぐに実際のコミュニケーションに使えるということにもつながります。また日常生活の中で生徒同士の間で友情が生まれ、週末や長期休暇の時、日本人生



共に寮生活を送る留学生と日本人生徒。教師、日本人生徒との授業外のコミュニケーションも多く、ホームパーティーなどで盛り上がる

徒の家にホームステイに行き、日本文化の理解を深めることができるようになります。また、ほとんどの教員が校内の教職員住宅に住んでいるので、留学生から何か相談や質問があったら、いつでも対応できるような環境が整えられています。

もう一つは大胆に外国人日本語教員を起用することです。直接教授法の欠陥を補足するために海外から日本語教育の専門家を招聘し、留学生の母語による文法解説が行われ、ネイティブとノンネイティブ教員がそれぞれの長所を發揮し、チームワークにより教育効果を大幅にアップさせることができました。

高知県土佐市竜地区はジョン万次郎がアメリカという国に出会うきっかけとなった航海の船出の地であり、弘法大師(空海)が開いた四国八十八ヶ所の一つ青龍寺もあります。この長い国際交流の伝統を継承した日本語コースに世界各国の若者が集い、また英語や中国語など外国語を習う日本人生徒と一緒に異文化・異言語の生活体験を通じて、他に見られないような良き相互理解が生まれ、素晴らしい日本語教育と国際交流が実現しようとしています。

あちこち 日本語 ご紹介

海外編



スイス
ジュネーブ

国際都市ジュネーブで日本語を教えること

BELL Language School

Fader-石川-佳世子

ジュネーブはスイスじゃない?!

「ジュネーブに住んでいるの? じゃあ、冬は大変ねえ。雪に埋もれているんでしょう?」ジュネーブ住まいの私に日本の友人たちは一様に同じ質問を投げかけてきます。ユングフラウヨッホに象徴されるようなイメージゆえの質問です。でも返事はNO。地図の左下の方にフランスへ頭を突っ込んだ形で位置しているジュネーブはもちろんフランス語圏。アングロサクソン系というよりラテン系の気質をいやでも感じ取れる場所です。現地の人々は時として誇らしげに、時として自嘲気味にこう言います。「ジュネーブはスイスじゃないから」スイス人以上に非スイス人が多いこのジュネーブでそれが何を意味するのかが、日本語教師として生活していく中で面白くも(時には腹立たしくも)理解されていきました。

国際都市としてのおもしろさ

教師として駆け出しだった頃、初級クラスの授業で『日本、日本語、日本人』をワンセットで教えたときのことです。「日本、フランス、イタリア…」が国を表して、それに『語』をつけると言語を表すらしいと直説法の授業でもすんなり



国際都市ジュネーブならではの、さまざまな意見が飛び交う

と理解されていきます。

いい調子と内心ほくほくしながら『日本人、フランス人、イタリア人...』と進みます。「語」の代わりに「人」を入れかえればいいだけの話だからこれも問題なく分かるはず...。生徒のうち数人が苦労しているのが表情から見て取れます。痺れを切らした生徒が「先生、何を答えたらいいんですか? 母語を話す国ですか、生まれた国ですか、両親の国ですか?」今度は私の表情がこわばります。そうか、島国日本人の私と陸続きの大陸人の彼らと「国籍」という捕らえ方が根本から違うんだと目が覚めた一瞬でした。もちろんみなさん法的な紙の上での国籍は持っているわけですが、両親が国際結婚だった場合二重国籍だったり、生まれた国と育った国がまったく違った場合は何を以て自分のアイデンティティーを感じるかは人によってさまざまなのです。「日本という国に生まれ育って、日本語を母語として育ったら必然的に日本人」当たり前と思ってきた

公式は(ある意味で幸運にも)崩れ去って行きました。

教室の中は多国籍軍?

そんなインターナショナルな環境の象徴がジュネーブにある国連。その一つの機関であるWIPO(世界知的所有権機関)の職員の方々が学ぶBELL Language



出席率は90パーセント以上。熱心な生徒から生きた比較文化を学ぶ(左から4番目が筆者)

Schoolで現在、日本語を教えています。9人の生徒が2年目の授業に通ってきます。みなさん激務をぬっての昼休み、90分授業が週2回ですが、出席率は昨年からの90パーセント以上。ひらがなの定着度のばらつきがほとんどなく、1年目初期の段階からすんなりと漢字かなまじり版『みんなの日本語』を読みこなした実力は彼らの熱心さが表れていると思います。日本語を始めた動機はいろいろ、出身国も見事にばらばら、でも熱心さは同じ。一つの文型をめぐって母語では「こうは言わない」「私たちはこんな動詞を用いる」など、教師の私が生きた比較文化を学習させていただいています。教師は大上段から生徒を下に見て一方的に教えるのではなく、生徒である相手からも必ず何か学ぶ事ができると確信している私は、常に同じ視線で彼らと向き合っていてこそ良いクラス運営ができると信じています。仕事とはいえ、人との出会いがすべての基本なのですから。

教材紹介

『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』
『絵でわかるかんたんかんじ80』



『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 ことばにはしくみ(体系)がある

一橋大学留学生センター 庵 功雄

本書は日本語学(言語学)の入門書です。日本語学は日本語に関する研究の総称です。ことば(日本語)は複雑な体系を持っています。例を1つ挙げてみましょう。今、若者を中心に人気のあるグループに「モーニング娘。」がありますが、このグループの名前は雑誌などでは「モー娘。」と表記されることが多いです。さて、この「モー娘。」はどのように読まれているのでしょうか。実例を観察していると、テレビ番組などでは文字通りの「モーむすめ」ではなく、「モーむす」と読まれているようです。「娘」という漢字には「むす」という読み方はないにもかかわらず、こうした読み方が使われるのはなぜでしょうか。

日本語にはたくさんの短縮語があります。パソコン(パーソナルコンピューター)、デジカメ(デジタルカメラ)、ファミレス(ファミリーレストラン)などなどです。これらの短縮語の多くに共通するのは4拍で終わっているということです。「拍」というのはリズムの単位で、基本的にな1字に対応します(ただし、「ア、イ、ウ、エ、オ、ヤ、ユ、ヨ」は前のかたと共に1つの拍を作ります。なお、「っ」「ー」は単独で1拍になります)。

以上のことを基に「モーニング娘。」と「モー娘。」について考えてみると、両者の関係は「パーソナルコンピューター」と「パソコン」の関係に対応するものであることがわかります。つまり、「モーニング娘。」や「パーソナルコンピューター」のような短縮語ではない場合には長さの制限がないのに対し、「モー娘。」「パソコン」のように短縮語になると、上で見た多くの短縮語と同じく4拍になり、それに対応して「娘」も「むすめ」ではなく「むす」と読まれることになるのです。



コラム3 「スリーエーネットワークがどこですか。」

このように、ことばは体系的なものであり、日本語学(言語学)はことばが持つそうした「しくみ(体系)」を明らかにするものなのです。日本語は母語であるため、私たちは日本語のことなど全部わかっていると思いきがちですが、そうではないことは日本語を母語としない外国人に日本語を教えてみるとすぐにわかります。例えば、「私は庵です。」という文と「私が庵です。」という文はどちらも使われますが、2つの文の違いは何でしょうか。外国人に違いを説明してほしいと言われたときに説明できるでしょうか。

こうしたことからわかるように、日本語学(言語学)の研究は決して日本語教育と無関係なものではなく、むしろ両者は密接な関係にあるのです。本書ではそうした点も踏まえ、音声・音韻、形態、統語、運用、談話・テキスト、方言など日本語のさまざまな姿をできるだけ幅広く紹介しています。

本書を読まれた方に日本語(ことば)の美しさを知っていただければ望外の幸せです。



§22方言 2-1. 柳田国男と方言周囲論

新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える

A5判 340頁 1,800円
庵功雄著



初級を教える人のための 日本語文法ハンドブック

A5判 460頁 2,200円
松岡弘監修
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敬弘 共著



絵でわかる かんたんかんじ80

B5判 80頁 1,300円
 武蔵野市帰国・外国人教育相談室
 教材開発グループ編著



『絵でわかるかんたんかんじ80』凡人社麹町店店頭イベントのお知らせ

『絵でわかるかんたんかんじ80』の著者による教材紹介を凡人社麹町店サロンスペースで行います。予約不要、参加費無料のイベントです。

日時：6月2日（土）14:00～15:30

講師：河北祐子先生、矢竹富美代先生

（武蔵野市国際交流協会 帰国・外国人教育相談室）

会場 / 問合せ：凡人社麹町店 tel:03-3239-8673

『絵でわかるかんたんかんじ80』 外国人の子どものための「読む」からはじめる漢字学習 - 認識・定着・確認の3段階構成 -

武蔵野市帰国・外国人教育相談室 教材開発グループ

初めて漢字をみたとき、子どもの目にはどのように映るでしょうか。「模様みたい!」「何かの形!」と感想はさまざまです。必ずしも、画数の少ない漢字が覚えやすいとは限りません。画数が多くても特徴のある漢字のほうが印象に残るようです。本書は、このような点に配慮しながら小学校1年生の配当漢字80字を、1課4文字で構成しました。絵を手助けとして、一つ一つの漢字がもつ意味の認識をしながら文字の識別ができるよう工夫し、まず「読める」ことを到達目標と考えました。また、使用単語や文型は、負担を少なくするため最低限におさえましたので、どの学年に編入した子どもにも適しています。

1課は3ページで構成されています。

【p1・認識のページ】

まず：左側の絵をみせて、ことばを理解しているか確認します。

指導者は「 はどれ?」 子どもは対応する絵を指します。

(例:「ムシはどれ?」 子どもはムシの絵を指す。)

一つ一つの絵について同様に確認します。

つぎに：指導者が漢字をさして「 」と読みます。

子どもは、絵の中から対応する絵を選び「 」といいます。

(例:指導者が「虫」をさして「むし」 子どもは「虫」の絵を選び「むし!」)

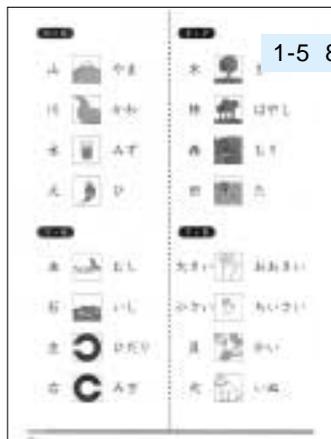
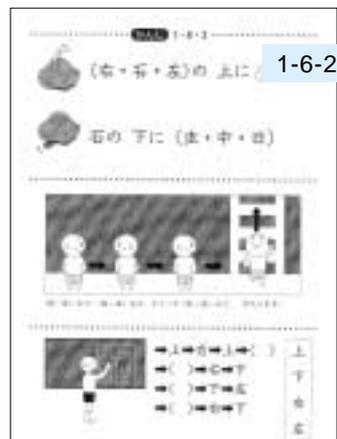
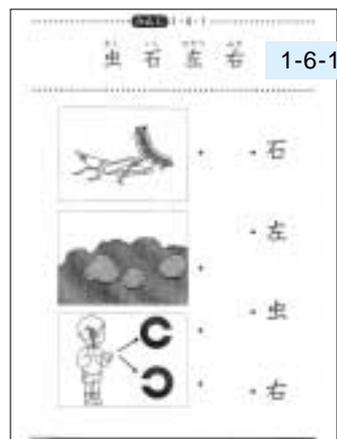
一つ一つの漢字について、同じ手順で練習します。

それから：役割を交替。指導者が絵を指します。 子どもは漢字を選びます。

さいごに：子どもは、ことばをいいながら絵と漢字を線で結びます。

【p2・定着のページ】

定着のための選択式の練習。()の中に正しい漢字を入れる問題では、線で結ぶか、市販のシールを使って選択肢の漢字シールを作って置き、貼らせませす。書きたい子には書かせませす。



【p3・確認のページ】

上の部分は、定着を確認する仕上げに使います。

下の部分は書き練習です。子どもが書きたがったら、書き順を見守りながらチャレンジさせてください。

巻末には、学習した漢字の絵入り一覧があります。

使い終わったワークシートは、漢字カードや絵カードにして利用してください。





セミナー SEMINARS



『みんなの日本語初級』を使った初級日本語の教え方
 ご好評を頂いております『みんなの日本語初級』セミナー、今回は滋賀県の日本語教育機関のご協力を得て開催することになりました。周辺教材を活用しながら、どのように効果的に教えたらいいか、参加者の皆様と一緒に考えたいと思います。

日時：5月12日（土）10：00～15：00
 講師：鶴尾能子（スリーエーネットワーク 日本語講師）
 会場：（財）滋賀県国際協会 TEL:077-526-0931
 （滋賀県大津市におの浜1-1-20ピアザ淡海2階）
 定員：80名（定員になり次第締め切ります）
 申込締切：5月7日（月）
 参加費：BNN会員1,000円 非会員2,000円
 問合せ/申込み：金網蓉子
 TEL&FAX:077-523-1061
 E-mail: painn@mb.infoweb.ne.jp
 主催：びわこ日本語指導者ネット（BNN）

『新日本語の中級』秋田セミナー
 『新日本語の基礎』に続く中級テキスト『新日本語の中級』が昨秋刊行しました。教材の内容を理解して頂き、クラスでの指導に役立てて頂けるよう制作関係者による教材説明会を、今回は秋田で開催いたします。

日時：6月23日（土）14:00～16:00
 講師：春原憲一郎（（財）海外技術者研修協会）
 会場：ジョイナス 大研修室 TEL:018-837-1171
 定員：100名（定員になり次第締め切ります）
 申込締切：6月16日（土）
 参加費：無料
 問合せ/申込み：今野（秋田にほんごの会）
 TEL&FAX:018-831-4644
 主催：秋田にほんごの会
 後援：秋田県国際交流協会
 協力：スリーエーネットワーク

ほん

BOOKS

本誌に表示した価格は税別です。

みんなの日本語初級

翻訳・文法解説タイ語版	発売中	2,000円
翻訳・文法解説インドネシア語版	発売中	2,000円
練習C・会話イラストシート	発売中	2,000円
初級で読めるトピック25	5月下旬発売予定	1,400円

新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—	発売中	1,800円
絵でわかるかんたんかんじ80	発売中	1,300円
韓国語レッスン初級	発売中	2,400円
韓国語レッスン初級 カセットテープ	発売中	3,200円
新日本語の中級 分冊中国語訳	6月発売予定	1,700円
完全マスター 1級 日本語能力試験読解問題対策	6月発売予定	予価1,200円
日本語文法演習 自動詞・他動詞、使役、受身	ボイス	
	7月発売予定	1,300円

みんなの日本語 会話ビデオ みんなの日本語初級 会話ビデオ
 みんなの日本語初級 会話ビデオ
 4月下旬発売予定 NTSC方式 40分 45分 各10,000円



『みんなの日本語初級』本冊各課の「会話」を映像化しました。

「会話」がどのような状況・場面で行われているかを提示することにより、その課の学習目標、内容（表現・文型の意味機能）が明確になります。

「会話」の導入をスムーズにするだけでなく、映像に収められた様々な情報（登場者の背景、人間関係、日本事情など）が、学習活動の展開に役立ちます。

お知らせ INFORMATION



皆様からの投稿や各コラムへのご質問、ご意見等をお待ちしております。採用させて頂いた方には粗品を進呈いたします。
 本誌をご希望の方は、お名前、ご住所、所属をFAX等で編集部までお知らせください。無料でお届けします（国内のみとさせていただきます）。
 『Ja-Net』第18号は2001年7月25日発行予定です。

当社のホームページをリニューアルしました。日本語教材、一般書籍、セミナー等、詳しい最新情報を掲載しています。今まで以上に、様々な情報をお届けしていきたいと思っております。ぜひ、ご覧ください。

ホームページアドレス

<http://www.3anet.co.jp>



Ja-Net 季刊 ジャネット No.17

スリーエーネットワークという社名は、アジア (Asia)、アフリカ (Africa)、ラテン・アメリカ (Latin America) のいわゆる発展途上国の多くが存在する3つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好の促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2001年4月25日発行
 発行人 小川 巖
 発行所 (株)スリーエーネットワーク
 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル
 Ja-Net編集部 TEL 03-3292-6410 FAX 03-3292-6197
 営業部 TEL 03-3292-5751 FAX 03-3292-6195
<http://www.3anet.co.jp> E-mail: ja-net@3anet.co.jp
 日本印刷 (株)
 © 2001 by 3A Corporation Printed in Japan (禁無断転載)